家族と私

A5　　石川　慧（いしかわ　けい）

１．家族の紹介

私は、コミュニティとは、人と人とが意見を交換するなどしてコミュニケーションをとる場である、と考える。現代では、フェイスブックやツイッターなどいろいろな交流の手段があるが、私にとって大切なコミュニティは、家族や友人など気の置けない、信頼できる人たちと直接対面しながら交流できる場所である。とくに家族はいちばん長い間生活を共にした人々であり、互いのことをよく知っているので気を使うことなく何でも話せる存在である。相談事などはよく母に聞いてもらうことがあり、父とは共通の趣味を持っているので、それについて話すことで互いの知識も増えるし、とても楽しい時間を過ごすことができる。また、二人の弟とはたわいない話で盛り上がることができる。さらに、私が家族の相談に乗ることもときどきあり、彼らの役に立てたと思うときは大変うれしく思う。現時点での私にとって一番大切な場所は、気を使う必要がなく、安心して休息を得たり、共通の話題を話すなどして楽しめる場である。

家族内での具体的なコミュニケーションとしては、私と父は車が大変好きで、いっしょに F1 や GT などのモータースポーツの番組を観たり、興味のある車種の外観や性能について互いの意見を言い合ったりする。父は私より車についての知識が豊富で、車に詳しい友人も持っているので、父を通して得られるいろいろな情報も面白いと思う。

母には入試のとき、精神的に大変なときに相談に乗ってもらったり、疲れたときに励ましてもらうなどして心身ともい支えてもらった。

弟たちとは、特に共通の趣味があるわけではないが、よく一緒にコント番組を観て楽しみ、時々互いの学校生活の話をしたりする。　昔はよくケンカをしたが、最近は互一緒に家にいる時間が少ないせいか、互いに精神的に成長したせいなのか、激しいケンカはない。

数年前であれば、私にとって一番大切なコミュニティは、友人たちとの交流の場である、と答えていたと思うが、最近は、アルバイトや学校の課題などで忙しく、昔よりも友人と交流できる時間がない。私にとっての一番大切なコミュニティが家族になったのは、私自身の生活の変化が大きく影響していると思う。

２．インタビュー相手　　焦蘇揚さん　　と、私の家族

焦さんは、上海の大学の寮でほかの学生３人と生活していた。３人のうち２人とはよく話すが、もう１人とはあまり交流がなかったようだ。彼らと焦さんはトランプや五目並べをしたり、勉強を助け合ってしたり、とても楽しそうだと思った。

私がインタビュー相手として焦さんを選んだ理由は、私は、長期にわたる他人との共同生活をしたことがないので、それがどのようなものかをもっと知りたいと思ったからだ。

楽しいことばかりでなく、共同生活を続けるに当たり、大変なこと、気を付けていることがあったら、具体的に知りたい。　そして、私自身の家族へもインタビューし、私の家族への思いと、彼らの家族への思いの同じ点や、相違点などを知りたい。

３．インタビューの結果

やはり、長い間生活を共にしていると、互いに衝突しそうになることがあるそうである。そのような時はケンカになる前に距離を置くようにしているようで、焦さんは図書館へ行って、互いの気持ちが落ち着くまで待つそうだ。

大学へ入ってからはそう多くはないが、私は小・中学生の時、家族とけんかになることが多かった。特に、２人の弟たちとのケンカは絶えなかった。具体的には、テレビのチャンネル権や、おやつの争奪などで口げんかになることが多かった。友人といるときは、相手に嫌われたくないのでケンカになるようなことは言わないし、そのようなことは避けていたが、家族といるときは、特に弟といるときは、思ったことは何でも言ってしまうようだ。年齢もそう遠くなく、ともに生活してきた時間も長いので、あまり気を使う必要がないからだと思う。大ゲンカをした後は、しばらく口をきくことさえしなくなるが、結局、毎日顔を合わせるのでいつの間にか、元通りになっている。今でも思ったことは互いにはっきり言い合うので、軽い口げんかになることはたびたびある。両親ともケンカをすることが多かったが、それは私が中学生時代で、私が勉学に身が入っていなかったため私の将来を心配し、勉学に向かわせようとしたためであった。大学に入り、私に分別が大体ついた今では勉学のことで言い争いになることはないが、家事を手伝っていて指摘されることはある。例えば、ふろ掃除と洗濯を手伝うが、母に私のやり方は雑である、とよく言われる。「お前は不器用だから、細かいところにも注意を払いなさい。」とも昔からよく言われていたが、自分ではそんなことはない、と思っていた。が、先月、大学の看護演習のベッドメイキングで予想以上にうまくできなかったので、やはり私は器用なほうではないのかもしれない、と思い始め、母の言うように細かいところにも注意を払い、物事をもっと丁寧に進めるようにしよう、と思った。　一方で、友人といるときは主に気晴らしをするときであるし、ともに過ごせる時間がそんなに長くないので、いっしょに楽しみたいという思いが先立つので、衝突しそうになることがあれば焦さんのように、距離を置くようにする。　よって、私の短所や欠点などをよく知っていて、それを遠慮なく指摘してくるのは今のところ主に家族であり、それによって反省することも最近は多い。なので、やはり家族は私にとって貴重な存在である。

以上が、私の家族に対する思いであるが、私の家族は家庭に対してどのように思っているだろうか。実際にインタビューしてみた。　まず、父は、「家庭は仕事場での疲れをいやすことができ、遠慮なくくつろげる場所で、くだらないジョークも言えてしまう。」と、言っていた。母は、「家族同士意見が食い違い、衝突するときもたびたび

あるが、言いたいことをはっきりと言い合うことができる唯一の場所であるし、やはり、気を使うことがいらないので一番くつろげる、リラックスのための場所。」、私の弟は、「母さんがうるさくてうざいと思うときはよくあるが、よく考えればうえ、学校より家にいるときのほうが気を使わずのんびりしている。」と、言っていた。　彼らの答えは、ほぼ私が予想していた通りであった。両親にとって、家庭とは休む場所であり、仕事場では気の合う人間とも合わない人間とも協力して働かなければいけないが、良好な人間関係を保つためにお互いに譲歩する必要があり、家庭ではそれをしなくてもよい。また、一緒にテレビを見たり、話をしたりしてゆったりと楽しい時間を過ごせる大切な場所なのだそうだ。弟にとっては、家庭は、自分が生まれ育った場所であるので当たり前すぎて、そのコミュニティが彼にとってどんな価値を持つか、考えをまとめることができないようだった。

４．家族と私

家族の意見に共通しているように、私にとっても家族・家庭はゆっくりと気を使わずに過ごせる場所である。また、他人には言いにくいことなどを相談できたり、他人といるときとは違い、人間関係をあまり意識することなく付き合える存在である。友人や先輩などといるときは、無意識に良好な人間関係を保とうとして自分の思っていることすべてをいうことはできないが、家族といるときは、比較的何でも言えていると思う。このように、私にとって家族はあまり自分を抑えて過ごす必要のない唯一の存在であるで、とても大切である。また、友人や先輩などは、時がたつにつれて変わったりすると思うし、どの人と友達になりたいか選んだりできる。だが、家族は自分が選ぶことができない、自分が一生付き合っていく存在である。言い換えると、好きな時もいやな時も付き合っていかなければならない関係で、私という人間のいいところま悪いところも知っている存在である。ここまで私のことを知っている人間はほかにはまだいないと思う。学生時代が終わり、就職して自立すれば家族と会う機会は減ってしまうだろう。だが、そのあともこれまでと同様に、お互いをよく知りあっている関係、気を使わない関係を維持していきたい。そのために、しなければいけないことはとくにはないと思う。この先、家族というコミュニティをどうしていきたいか、という問いについては、今まで通りの家族関係でいいと思うので、今まで通りの付き合い方でいきたい。

５．クラスについての感想

多文化コミュニケーションという授業名から、お互いの文化について学ぶのが主だと思ったが、自分たちが一番大切なコミュニティ紹介をすることで、今回は自分の家族について深く考えさせられた。また他の人たちのコミュニティ紹介によっても、いろいろな種類・人間関係があり、人それぞれに大切なコミュニティが異なっていて面白

いと思った。この授業により、いろいろな人の考えや人間関係、人との付き合い方を知ることができ、価値観がさらに広がったと思う。